

Title	37 : 千葉病院矯正歯科における過去5年間の初診患者の動向について
Author(s)	升田, 菜穂子; 末石, 研二; 茂木, 悦子; 有泉, 大; 加瀬, 利美
Journal	歯科学報, 118(3): 256-256
URL	http://hdl.handle.net/10130/4595
Right	
Description	

No.37: 千葉病院矯正歯科における過去5年間の初診患者の動向について

升田菜穂子¹⁾, 末石研二²⁾, 茂木悦子²⁾, 有泉 大²⁾, 加瀬利美¹⁾
 (東歯大・千歯セ・歯科衛生士部)¹⁾ (東歯大・矯正)²⁾

目的:平成30年度より東京歯科大学千葉病院が有床診療所となり、千葉歯科医療センターへと名称も変更される。私たちは2012年から千葉病院矯正歯科の患者動向を調査しており、病院としてはほぼ最後となる5年間の患者動向をまとめ、今後もより質の高い医療を提供し東京歯科大学のさらなる発展に活かすことを目的として本研究を行った。

方法:2012年1月～2017年12月(2014年を除く)の初診患者を対象とし調査票等をもとに、初診患者数、精密検査受診者数、治療開始者数、性別及び年齢、治療区分、不正咬合分類などについて5年間の推移を調査した。

結果:初診患者数は2012年から2015年の間に100人近く減少してはいるが、2015年からは安定しておりほぼ増減がない。そのうち治療開始者率は2012年48.4%から2017年54.0%と増加しており患者実質人数の減少は見られない。これには紹介患者率が2012年の48.3%から年々次第に増加し、2017年には

80.2%になっており、このことが患者数の維持に貢献していると考えられる。男女差は4:6で女性が多くほぼ変化はみられない。治療開始年齢は4～19歳が2013年には79.0%を占め、それ以降も75%以上で、若年者が多い傾向は例年通りである。早期治療患者としては毎年40%近く存在し、本格治療患者は年々減少、外科矯正・部分矯正患者はほぼ横ばいで、唇顎口蓋裂等先天異常患者は微増であった。不正咬合の分布の割合は毎年大きな変化はなかった。**考察:**過去5年間の患者推移は、初診患者数の減少は見られたものの、治療開始者数は変化が見られず安定しており、これは紹介患者の増加が一因であると考えられた。紹介患者は他院にて治療の必要性のコンサルタントを受けており、治療開始の決断がスムーズなのかと思われる。今後も地域密着型の医療センターとして発展していくためには、医療連携等を通しての紹介システムの強化はひとつの大きなポイントとなると考えられる。

No.38: 東京歯科大学千葉病院総合診療科における歯科医師臨床研修

—大学のメインキャンパス移転に伴う歯科医師臨床研修の変化—

杉山節子¹⁾, 高橋俊之¹⁾, 杉山利子¹⁾, 亀山敦史¹⁾²⁾ (東歯大・千歯セ・総合診)¹⁾ (東歯大・修復)²⁾

目的:歯科医師臨床研修制度の法制化がなされた平成18年度以降、東京歯科大学千葉病院で実施してきた歯科医師臨床研修は、大学メインキャンパスの水道橋移転に伴い、診療体制や総合予診のなどにシステムの変更が生じた。本報告では、水道橋移転前(平成25年度)と移転後の3年間(平成26年度～28年度)での、千葉病院総合診療科における総合臨床研修で研修歯科医があげた診療実績の推移に着目し、比較を行った。

方法:平成25年度から平成28年度に、東京歯科大学千葉病院に在籍した研修歯科医を対象とし、平成25年度から平成28年度に千葉病院で作成した「医療収入および患者数実績」と「歯科臨床研修医1年次診療実績一覧表」をもとに分析を行った。

結果:総合診療科配属の研修歯科医数(平均)は、平成25年度34.7名、平成26年度は19.7名、平成27年度23.0名、平成28年度は17.3名だった。平成25年度から平成28年度の4年間における研修歯科医1人当たりの各期の平均診療日数は、平成25年度は55.5日、平成26年度は65.6日、平成27年度は55.2日、平成28年度は64.3日だった。研修歯科医1人当たりの平均延べ患者数は、平成25年度は90.3名、平成26年

度は184.7名、平成27年度は154.7名、平成28年度は195名であった。また、1人の研修歯科医が1日あたりで担当した平均患者数は、平成25年度は1日平均1.6名で、平成26年度は2.7名、平成27年度は2.8名、平成28年度は3.0名であった。研修歯科医1人当たりの期間中の平均医療収入は、平成25年度は37万1千円、平成26年度76万1千円、平成27年度は59万4千円、平成28年度は91万6千円で、平成25年度に対して平成26～28年度で有意に増加した。

考察:東京歯科大学の水道橋移転にともない、千葉病院の教職員が大幅に減少したため、診療スペースの整理や縮小が行われ、一部の診療システムも変更した。研修歯科医1人当たりの担当患者数や医療収入が増加したのは、一般歯科系の専門診療科(保存科・補綴科)での受診を希望した初診・再初診患者のうち、高頻度治療レベルの診療で対応可能と判断した患者を研修歯科医が以前と比べて積極的に担当するようになったことが一因と考えられた。また、総合診療科において従来行ってきたペア診療システムを廃止したことも研修歯科医の診療の効率が上がった原因の1つと思われた。